

ニュツサのグレゴリオスにおける救貧と否定神学

——名辞の神学への一試論——

土井 健 司

はじめに

カッパドキア教父の一人ニュツサの司教グレゴリオスの残存する説教の一つに、病気の貧者の救済を訴える『これら一人にしたことは私にしたこと』について⁽¹⁾（以下「説教「私にしたこと」と略記）がある。この説教を読みすすめていくと、読者はある種のもどかしさを感じ、その思いは読み進むにつれ徐々に強まっていくように思われる。この説教において、ニュツサのグレゴリオスは病気の貧者については詳細に語るが、他方その病名というものを一切

語らないからである。一体ここで救済が訴えられている貧者は何という病気なのか。一言、その名称があれば読み手は安心できようが、グレゴリオスはこれを語らない。この「語らない」ということそれ自体は偶然の場合もあるだろうし、そもそも「ない」という否定について何事かを論ずることは難しい。しかし病名を語らないということには独特の意味がある場合もあるのではないか。

この説教で語られている病気は、古代に言われる「レプラ」ないしは「エレファンティアシス」と推定できる。そうであればなおさらこれら人々に忌み嫌われた病気の名称を語らないこと、そこに意味を感じることも否定しきれな

い。⁽²⁾。そもそも「病名」というものが人を差別する一つのレッテルとして機能し、病者に第二の不幸を引き起こすことについては言を俟たない。たとえば明治時代初期の癩者に関する法について「病人の側からすれば、病気の悲惨さを味わったうえに、知人に忌避され、交際の断絶を迫られるのである。政府が病名票の貼付に二重の意味をこめたのに呼応し、人民の側でも二重の恐怖(罹病の恐怖と絶交の恐怖)を抱くようになる⁽³⁾」との評価もある。ここで述べられている法とは「病者ある家には、その病名を書いて門戸に貼付する」とのことであり、これは施行後貼付する者がなく、却って病者を隠したことから、明治一五年に廃止されたという。なお、ニュッサのグレゴリオスと同時代を生きた友人のナジアンゾスのグレゴリオスにも同様の病者の救済を訴える説教が残されているが、そこで彼は「聖なる病に破壊された人びと」(ὁπὸ τῆς ἱερᾶς νόσου διασθενώσασιν)と述べて、この病気を聖化して⁽⁴⁾いた。このような聖化も一種の救済のレトリックであろうが、ニュッサのグレゴリオスはそのようなことも述べることなく、後に見るように、ひたすらその具体像を描いている。こうしたことから小論では「語らない」という否定の意味を論じる

ということを敢えて試み、そこからグレゴリオスの否定神学との関連について可能性を探ってみたい。

一、グレゴリオスは病名「レブラ」を知っていたのか

グレゴリオスが描く病者が「レブラ」ないしは「エレファンティアシス」であるとするとするなら、何故グレゴリオスはこの病名を語らないのか。その思想的、社会的意味を探ることが小論の目的であるが、その前にそもそもグレゴリオスがこの病名を知らないという可能性を検討しておきたい。なぜなら事実としてそのような病気であるとしても、グレゴリオス自身がその名称を知らないのであれば、彼がこれに言及するはずがないからである。そこでグレゴリオスがレブラ、およびエレファンティアシスを知っていたのかどうかについて検討する必要がある。

「レブラ」について、この語は聖書の中に見出すことができ、福音書など聖書文書を読んでいたグレゴリオスがこの病名を知らないはずがない。実際この概念についてギリシア語文書データベースである「JTS」を検索すると、ニュッサのグレゴリオスの著作において一二の用例が確認される。⁽⁵⁾

その詳細については別の拙稿に譲るが、結論をまとめると以下 a から d のようになる。⁽⁶⁾

a グレゴリオスは「レプラ」をマタイ福音書八章三節など聖書記事との関連において使用している。「第一書簡」の中に一箇所、自分についてこの概念を使う例が見られるが、それも広くピリピ書二章のケノシスとマタイ福音書二二章六節との関連が認められる。

b マタイ福音書八章冒頭に見られる奇跡物語との関連で言えば、グレゴリオスはこのレプラの癒しの奇跡物語について、イエスの神性、その神的力量を表わすものの一つとして理解している。

c 「レプラの人シモン」(マタイ福音書二六章六節とルカ福音書七章四五節の組み合わせ)との関連でグレゴリオスは、イエスがシモンの口づけを望まれたことに注目し、癒しや受肉との文脈でこれを使用する。ただそれぞれ一箇所のみであって、これによって何か積極的に論じるには至っていない。

d 「第一書簡」の中に「私はレプラの人と思われたことはない」の一文があり、レプラを患う人を人間以下に見なすように解せる箇所があるが、これについては、ある司教

から無礼な扱いを受けた鬱憤を愚痴るこの書簡における難言として理解したい。むしろ説教「私にしたこと」においては、後述するように極貧の病者のことを何よりも「人間」であるとグレゴリオスは主張しているからである。

以上グレゴリオスは一般的にこの概念を使用することは決してなく、つまり彼の時代の誰かについてこの概念を使うことはない。あくまでも聖書の記事との関連で使用するのであって、彼自身の周辺の誰かをこの病名で呼ぶ事例は一切確認できない。

さらに、このことはグレゴリオスの特徴の一つと捉えられる。たとえば、ナジアンゾスのグレゴリオスは同時代のことについてレプラという病名に言及するからである。三七九年にバシレイオスが亡くなると、友人グレゴリオスは『バシレイオス頌』(*In laudem Basilii Magni*)という著作を書き、そこでバシレイオスの事績を称えている。その第六章においてバシレイオスが設立した救貧施設「バシレイアス」に言及している。ニュッサのグレゴリオスも何らかの仕方での施設に関わっており、この説教の中でこれに言及した箇所がある。⁽⁸⁾ また「われわれの目には、もはや恐るべき悲惨な光景はなく、死以前に死んでいた人びと、

四肢のほとんどが麻痺してしまった人びと、町や家から、広場や泉から、最愛の人からさえも追放され、むしろその名称、あるいは体つきによって認知される。共に住みくびきを共にすることによる会議や集会には決してやって来ず、病気のゆえに憐れまれるどころか、憎まれている」という箇所は、同様のことがいっそう詳細にニュッサのグレゴリオスの説教でも語られている。ニュッサのグレゴリオスは兄バシレイオスのために書かれた『バシレイオス頌』を讀んでいたと考えられ、説教の文章を作成する上で参考にしてきた可能性がある。そして、確かにナジアンゾスのグレゴリオスも安易に病名を述べることはないが、それでもこの章の最後のところでこれを洩らしてしまう。

そして、料理人、豊かな食卓、料理の魔法と発明、美しい座椅子、柔らかで流れるような衣服は他の人びとのもの、しかし病氣の人びとはバシレイオスのもの、傷の治療、キリストの模倣もそうであり、ただし彼は、言葉ではなく行為においてレプラを清めたのであった。¹⁰⁾ここではマタイ福音書八章三節にあるキリストが「清くなれ」との言葉によってレプラを治癒したことに言及されている。ただバシレイオスはキリストを模倣しつつも、キ

リストとは異なって行為・行動によってレプラを清めたと述べられている。ナジアンゾスのグレゴリオスによるこうした言及に対して、ニュッサのグレゴリオスは、ナジアンゾスのグレゴリオスのものよりも何倍も長い説教において、一言も病名には言及していない。また、マタイ福音書八章三節という聖書箇所をもとにナジアンゾスのグレゴリオスは、救貧施設バシレイアスにおいて世話を受けていた人々のことを「レプラ」と表示しているが、こうした用法はニュッサのグレゴリオスの著作に見られるレプラの用法とは異なっているのである。

救貧施設バシレイアスの中で世話を受けていた人々についてナジアンゾスのグレゴリオスはレプラと述べる。そしてニュッサのグレゴリオスは、レプラという病名を知っており、また同じバシレイアスにおいて働く人びとに言及しつつそこで看護を受けていた病者がレプラと呼ばれる病氣であることを認識していたが、説教「私にしたこと」においてはこの病名に一切言及していないのである。

二、グレゴリオスは病名エレファンティアシスを 知っていたのか

では、エレファンティアシスについてグレゴリオスはこの言葉を知っていたのだろうか。レプラと同様に「LIG」を使い、*ελεφαντιασ*⁽¹²⁾で検索すると nothing found という結果を得る。つまり残存する著作を見るとグレゴリオスがこの概念を使った形跡はない。そこでグレゴリオスがこの言葉を知らなかった可能性が考えられる。しかしわれわれはここで別の可能性を指摘したい。説教「私にしたこと」のある箇所での病者の外観について「動物」（単数／複数）に関連づけるテキストが見られる。

その結果、純粹に人間である特徴も他の動物の特徴も明瞭には身にまとわず、その外観は曖昧なものとなっています。……また動物の方に向けて考えると、動物がその外観の類似を認めることはありません⁽¹³⁾。

ここでグレゴリオスはこの病者を動物に向けて捉える可能性を語っている。その形姿から純粹に人間と捉えることはできず、また動物と見なすこともかなわない。当然動物

たちがこれらの病者を同類と扱わないからであるという。

結果として動物の可能性が否定される。しかしここでその可能性に言及する以上、この病名「エレファンティアシス」(場合によっては一般に「象」「象牙」を意味する *ελεφας*)を知っていて、聴衆が了解することを前提に、これを暗示した可能性は否定しきれない。さらにこの点を考慮するなら、文献上エレファンティアシスのみならず、同類の病名として「レオンティアシス」(獅子面病)、「オフィアシス」(蛇皮病)、「アロペキア」(狐皮病)にも言及する偽ガレノス文書の『概要あるいは医師』(第一三章)との関連が推定される⁽¹⁴⁾。説教「私にしたこと」を含めてエレファンティアシスに言及することはないが、暗示していると解釈可能な箇所として上記テキストが挙げられるのである。

また通常紀元前一世紀ごろからこの病名は複数の文献で確認できるようになり、その後徐々にではあっても一般化していったとされる以上、グレゴリオスがこの概念を知っていたとしても無理はないことを加えておきたい⁽¹⁵⁾。ゆえにレプラの場合とは異なってエレファンティアシスについての認識については確実とは言えないが、その可能性は十分であろう。

なお概念としてはレプラの方が古く、エレファンティアシスは新しい。⁽¹⁶⁾ エレファンティアシスについて、最初期の報告の一つの博物学者ケルススによる記事を挙げておきたい。

しかし、イタリアではほとんど知られていないが、ある地域では頻繁に〔見られる〕病気があり、ギリシア人はこれを「エレファンティアシス」と呼ぶ。これはまた慢性疾患に数えられる。これにより身体全体に多くの斑点と腫ができる。斑点は赤色であるが、しばらくすると黒色に変わる。皮膚全体が不均等に厚くまた薄く、硬くまた柔らかくなり、何かうろこのようなもので粗くなる。身体は消耗し、顔、ふくらはぎ、足ははれる。この病気が長いときは、手足の指は腫の下に隠れてしまう。発熱し、それがかくもひどい悪に圧迫された人を容易に消耗させる。⁽¹⁷⁾

ここでは慢性疾患、身体全体にわたる斑点と腫、皮膚の変化、顔やふくらはぎの腫などが症状として挙げられている。もちろん病気の診断は病理学によるわけではなく症状など外見によること、また衛生面の悪辣な環境を考慮するならば、現代的な意味で一つの疾病として捉えることはでき

ず、そこには様々な病者が含まれていた可能性はあろう。その意味でもレプラとエレファンティアシスの区別は曖昧であったところもある。このことは、たとえば先述の偽ガレノス文書において確認できる。またマネトーンの『エジプト史』（『ヨセフス『アピオン駁論』第一巻二九一—三二四節）などでは「エレファンティアシス」の様な症状が「レプラ」と呼ばれている（とくにレプラ患者について「廃疾者たち」〔*νεκρωσθένων*〕と言われる）。ただしその場合「ヒポクラテス集成」(Corpus Hippocraticum)に見られる「レプラ」(これはたんなる引く搔き傷の場合もある)とは区別しなければならぬ。また医学書で両者を区別して論じるものも見られる。⁽¹⁸⁾ しかし専門の医師でない以上、グレゴリオスには両者の区別の必要もなかったと考えても無理はない。

グレゴリオスの説教における症状記述からすると、ここで語られている貧者の病気は「エレファンティアシス」ないしは「レプラ」であると推定される。以下この説教における病者の症状記述のうち主なものを挙げてみる。なお症状等に関わる場所に傍点を付し、原語を記しておく。

(a) 悪い病気のため、四足の状態になった人 (*δὲ τῆς*

πονηρὰς ἀρρωστίας εἰς τετραπόδου σχῆμα μεταπλασσομένου) は、ひづめやかき爪の代わりに両の手のひらに木をあてがい、人間の路上に新しい足跡を加えます。(GNO IX, 114,13-14)

(b) 両の手が両脚の用を足し、両膝が脚となっている。本来の脚やくるぶしはまったく不動になっているか (αἰ χεῖρες αὐτῶ τὴν τῶν κοῦντων καταλαμβάνουσι, τὰ γούνατα βάσεις γίνονται, αἱ δὲ κατὰ πόσιν βάσεις καὶ τὰ σφυρὰ ἢ παντελῶς ἀποροῦσιν) あるいは引き船のように適当に用意されて歩調を合わせて後を追う。(ἐπισύδεται) ようになります。(115,5-8)

(c) なぜなら自分自身を目にする間は、絶えず嘆きの始まりを有し、身体の失われた部分と残った部分のいずれか、すでに病気が浸食し尽くしたものと病気に残されているものいずれを嘆いたらよいのか、つまり、自分自身にこれらを見るのか、それとも病苦によって視覚が失われ (ἀμαυρωθείσης ἐν τῷ πάθει τῆς ὀφθαλμοῦ) 見ることができなくなるこのいずれか、これらを自ら詳細に語るのか、それとも病苦から声を取り除かれ (τῆν

φωνὴν ἐκ τοῦ πάθους ἀφηναιμένοι) 病苦を語る
 ことができなくなることか、「腐った」食物を食べるのか、
 腐敗に妨げられ口唇部分が病気に破壊されて (τῆ δία-
 φθορὰ τῶν περὶ τὸ στόμα μορίων) 容易にその
 食事を受け入れることができないうことか、また死んでいく
 部分の感覚の中で不幸になるか (ἐν αἰσθησεί τὰ
 τῶν νεκρῶν δυστυχουσί) そもそも感覚自体が
 取り去れる方がよいのか、こうしたこと途方に暮れてい
 るのです。この人々にとって、視覚とはどのようなもので
 しょうか、嗅覚とはどのようなものでしょうか、触覚とは
 どのようなものでしょうか、また病苦が進行し少しずつ腐
 敗が食いつくしていく他の感覚器官 (τὰ λοιπὰ τῶν
 αἰσθητηρίων, ἀ κατ' ἄλλῃρον νεμμένον τοῦ
 πάθους ἢ σηπεδῶν ἐπιβοσκεταί) はどのような
 ものなのでしょうか。(118,10-24)

(d) では「病者が」何をもっているというので告発する
 のですか。それは、体液が腐敗し、黒胆汁が体液に注がれ
 ることで何か腐敗させる分泌液が血液中にまき散らされる
 ことです。(ὅτι διεφθάρτι τὸ ὑγρὸν ἐν ἐκείνῳ
 καὶ τὶς σηπεδονώδης χυμὸς ἐγκρατεσπάρη τῷ

αἰματι τῆς μελαίνης κοιλῆς τῷ ὑπὸ πνεύρι-
εθίαιενς)。これらが症状の原因を探求する医学者から
聞くことです。(120,25-27)

(e) では、病気のこうした性質のために身体が流れる物
体 (πευστη οὐσία) となり、固まらずにずれてしまう
のであれば、一体この人はどんな悪いことをしているの
しょうか。(120,29)

(f) 手は切断され (ἡ χεῖρ ἡ κωτηρίαστα) て
いても、「その者は」共闘できないほど弱くはなりません。
脚に傷を負って (ὁ ποὺς ἡ χροίαστα) いても、神
に向かって走る妨げにはなりません。目が引き抜かれて
(ὁ ὀφθαλμὸς ἐξερρηῆ) いても、魂を通して見えざ
る財産を見えています。それだから身体の壊れた姿 (τῆν
ἀμορφίαν τοῦ σώματος) を心に留めてはなりません。
(122,23-25)

説教「私にしたこと」における病者の症状をまとめてみ
ると、次のような症状を示している。(1) 身体の流落、身体
としての形態の損傷、(2) 手足の麻痺、不具、指の不具、あ
るいは腐敗、(3) 感覚の麻痺 (視覚、嗅覚、触觉など)、(4)
口唇部分の腐敗を含む顔面損傷、(5) 腹部の化膿、(6) 慢性疾

患、(7) 喉の損傷、以上である。これらを総合すると、レプ
ラないしはエレファンティアシスと呼ばれる病気だと同定
してよいと思われる。ただグレゴリオスの著作にエレファ
ンティアシスという概念が見出せないことから、エレファ
ンティアシスとの認識をもっていなかっただ可能性もある。
少なくとも彼が両者を区別していたということは言えない。

以上の考察により、グレゴリオスは自ら説教で語る病者
がレプラ (ないしエレファンティアシス) であるとの認識
を有していたものと考えてよいであろう。

三、なぜ病名を語らないのか

一つの病気として認知し病名を知っていて、あるいは暗
示しているにもかかわらずこれを明言しないとすれば、そ
こに何らかの意図を読み取ることは可能であろう。そこで
これに関して、説教「私にしたこと」の中から推定される
ことを二つ指摘したい。

一般に名というものは物事を明示すると同時に隠蔽する。
われわれはものの名を知ること、そのものを一層よく認
識するものだが、一度名を知ってしまうと、日常化し慣れ

てしまい、名のために事象そのものを見なくなってしまう。その名の下にまとめられる一事例として処理してしまうからである。そこで病気の名称を語らないのは、病者の姿を描き、提示すること、そして聴衆に貧しい病者へ眼差しを向けるようにするためと理解できるのではないか。それはこの説教の中で幾度となく病者の姿が描かれていること、そしてグレゴリオス自身がそれを目の当たりにして涙したことも述べられていることから推察される。典型的な部分を一つ引用しておきたい。

〔この人々は嫌われているので〕他の人々と共同の泉はこの人々であふれることはないし、また河川はその病の汚れを飲み干すことにはないと思われています。犬が血に飢えた舌で水を飲んでも、この獣のために水が嫌悪されることはありません。しかしもし病気の人が水に近づくな、この人間のために水でさえも直ちにみんなの前で非難されます。こうしたことを詳しく語り、嘆き、このため必然的にこの哀れな者たちは、たまたま居合わせた者すべてに懇願する者となって、人々の前に身を投げ出すことになるのです。私は、しばしばこの悲しい光景に涙し、しばしばこの人に向けてこ

らえきれなくなりました。そして今このことを思い出すと私は心が乱れます。私は憐れむべき苦難を見ました。私は号泣しながらこの光景を見ました。⁽¹⁹⁾

この最後のところはグレゴリオスが一人称で語る希有な部分となっている。その他を含めて、この説教では実際に彼が目撃した病者の姿、様子がよく描かれている。それが彼が語ることを通して、その場に居合わす人びとに向かつてこれら病者への眼差しを開き、感染の恐怖からこの人びとに向かつて目を反らすことなく、憐れみを感じ、同じ人間としてこの人びとと接するよう促したものと理解できる。

以上は名というもの一般について、テキストをもとに指摘可能なことであるが、さらに病気の名称という点を考慮するならば、この病者たちがその病名によって認知され差別を受けていたことが挙げられる。先述の引用文には住民が汚されるのを恐れて、この貧しい病者たちには共同の水飲み場の使用ですら禁じていたとあった。また、ナジアンゾスのグレゴリオスはこの病者について「むしろその名称、あるいは体つきによって認知される」(*oudiati uanion* *ti odiatu roudiōdenoi*)⁽²⁰⁾と述べており、この病名によって人々は病者を認知し、これが差別の原因となつて

いることを述べている。こうした人びとに対してニュッサのグレゴリオスは人間としての「同族性」(ὁμογένεια)⁽²¹⁾を強調し、この病者がまぎれもなく人間であることを強調している。病者としてではなく、人間としての本性が強調されている。健康な者は病気の貧者について差別意識をもつべきではないという。

人間として人間たちのことを考えるのであり、「人間という」この本性のほかに特別のものを持っているのではありません。⁽²²⁾

この一文は、貧しい病者と健康な者たちとの差異を否定し、人間という本性の同一性を述べている行である。そしてこの一文はほぼそのまま再び繰り返して語られている。⁽²³⁾ 同じ句を二度繰り返すことは他に例がなく、この一文を強調していると言える。また人間としての本性を強調することから、この思想が「人間愛」(フィランソロピア)との連関で議論されていく。⁽²⁴⁾

四、否定神学と救貧——名辞の神学

救貧の説教において病名を語らないことと否定神学との

連関については、否定神学というものが神論である点を考慮するならいささか違和感を覚えるとしても無理はない。⁽²⁵⁾ しかしここでは神論に関わる否定神学と救貧における病名不告とが直接関連しているとするよりも、両者の根底にある名、名辞というものの考え方に共通点があると指摘したい。両者は名辞について同じ思想を根底に有しているのではないかと考えるわけである。こうしたある種名辞の神学的思想というものから否定神学、救貧というものが出てくるように考えることができる。

グレゴリオスの否定神学に関わるテキストは数多くあるが、ここでは名辞についての思想との関連で議論を展開するために『エウノミオス駁論』における一つのテキストを挙げて考察したい。

「不生性」(ἀγεννησία)の概念によって神の本質が捉えられるとするエウノミオスに対して、グレゴリオスは神の本質の不可把握性を論じる。その論点の一つは「名」(ὄνομα)というものの被造性や恣意性であり、もう一つは何にも捉えられない神的本性の無限性である。

というのも、神認識を明らかにするための何かの名称をわれわれが学ぶとしても、これらはすべて、ある人

物の個性を明示するような名称と共通の類似したものをもち。見知らぬ人を何かの特徴によって明らかにしようとする者は、この人がたまたまよい家系の人だとか、よい生まれの人だとか、さらに輝かしい財産があるとか、若さが花盛りで飛び抜けた身体の名声のため賞賛されているなどと述べるが、これらが述べるのは明らかにされた人の本性(φύσις)ではなく、その人について(περὶ αὐτοῦ)知られているものの特徴を明示したのである(というものは生まれの良きとか、多くの財をもつとか、評判よく有名であることや年齢のため賞賛されることは、人間性(ἀνθρωπότης)のことではなく、これらのいづれもその人について(περὶ τοῦ τινα)観られるものだからである)。

丁度そのように、聖書から取られた神を称える言葉のすべては、それぞれが固有の意味を提示しつつ、神について(περὶ τοῦ θεοῦ)明示する何ものかを示している。これらからわれわれは、その能力、悪を許容できないことを学び、また原因がないこと、限界によって制限されないこと、万物に及ぶその力、要するに何かその方について(περὶ αὐτοῦ)学ぶのである

る。しかしその本質(τὴν οὐσίαν)は、知性によって包まれることなく、言葉によって語られないものとして好奇の探求を許容せず、むしろより深淵なるもの探求を止め、神の御顔の前に言葉を投げかけるべきではないと述べて、沈黙によって(この本質に)敬意を払うよう命じられている。(傍点は筆者による)

以上いささか長く引用したが、このテクストにおける本思想は明白である。即ち、名辞というものは、あるもの「について」であって、その本性を表示するものではない。そのため「不生成」という概念は、神についてのものであって、決して神の本質を表示するものではないと言う。名辞というものについてのこの思想は、以上と同じ構図で説教「私にしたこと」における貧しい病者にも当てはめることができる。そもそもこのテクストのはじめには、人間に就いての事例が述べられていた。そこでは「人がたまたまよい家系の人だとか、よい生まれの人だとか、さらに輝かしい財産があるとか、若さが花盛りで飛び抜けた身体の名声のため賞賛されている」といったことが人間についてであって、人間の本性を示すものではないとされている。同様に病名は、病者についてであって、その人間としての本性を

表示するものではない。神の不可知性を論ずるための思想の基本となるものが、この説教で救貧の文脈で使われていると理解できる。否定神学と救貧とが同じひとつの根本思想、名や概念というものがものの本性を表示するものではないという思想を有している。

では、なぜ名や概念というものが本性を表示しないのか。今これを十分に議論する余裕はないが、『モーセの生涯』の中に見られる興味深いテクストを一つ挙げたい。

聖書（出エジプト三三章一〇節）はこれが見る者にとつて死の原因となると指示しているのではない。そもそものうちの御顔が見る者たちにとって死の原因となることであろうか。そうではなく神的なものはその本性からいのちの造り主であるので、神的本性の特質はあらゆる限定を超越することである。そこで神的なものが何か認識されるものであると思う者は、真・実・在から離・れ、把・握の表・象によって認識されたものに向かうのである、いのちをもたないことになるのである。というのもも・真・実・在は真のいのちである。それは認識には到達できない。そこでいのちを造る方が知を超えているのであれば、把握されたものは全然いのちなのではない。

いのちでないものが、いのちを生じさせることはできない。そこで、かくのごとくモーセにおいては、願望されたことは願望が満たされないうままであることによつて満たされるのである。⁽²⁷⁾（傍点は筆者による）

ここで語られているのは、神に対する「方向」である。名や概念に執着するならば、神へと「向かわない」という。名や概念というものが常に対象とは反対を向いているわけではないし、そのように即断することもできない。ここではあくまでも「神」ないしは神的存在についてである。神的存在はいのちである。いのちであるので、名や概念によつては捉えられないという。さらにこれは、同方向にあるがわれわれの捉える範囲、われわれの能力のさらに向こう側にいるといったことでもない。同方向にはなく、逆方向であると説明されている。それゆえいのちと反対方向、すなわち死に向かうと言う。比喩的な説明であろう。もちろん上記テクストから、これを救貧の次元において病気の貧者に適用することは現段階では確実とは言えない。しかし、いのちというものが概念的把握と逆方向に位置するとすれば、いのちそのものである神のみならず、いのちをもつ者、生きている貧者に適用する可能性もあろう。名や概念は対

象に向かうのではなく、真逆を向き、対象とは反対方向に向かう。病気の貧者をその病名で捉える者は、病名によって貧者から反れてその者に向かわない。このように神について述べられた同じことが、救貧の次元に適用することも可能であろう。

結論に代えて

これまでの議論をまとめてみよう。ニュッサのグレゴリオスは説教「私にしたこと」において病気の貧者の救済を訴える。その過程でこの病者について詳細に語っている。しかし、彼は「病気」であると述べつつも、「レプラ」あるいは「エレファンティアシス」と推定されるその病名を一言も口にするのではない。それは何故か。これが最初の問題提起であった。そこでまずグレゴリオスがその病名を知らなかったという可能性について検討した。結果「レプラ」については周知しており、他の著作で使用例がある。また「エレファンティアシス」について使用は認められないものの、暗示した箇所が見出される。また、一般的に四世紀にはこの病名は普及していたと考えられる。そこで、

少なくともグレゴリオスが知らなかったという理由は成り立たない。ではなぜ語られないのか。これについて説教「私にしたこと」から推定される理由は二点あった。一つは病者自身への眼差しの喪失である。第二は病気ではなく人間としての本性の強調である。病名を語ることで、病者への眼差しが喪失されてしまい、その人間としての本性が蔑ろにされることが懸念されたと推定できる。さらに否定神学との関連について、神の名が神の本質を表示するのはなく、神についてのものであると考えられているが、同様のことが病気の貧者にも該当する。病名はこの貧者についてであって、その本質を表わすものではない。むしろ病名は人びとをこの貧者から反らせてしまう。このような名辞についての思想が通低し、否定神学と救貧思想が展開しているように考えられる。

グレゴリオスは、病名を語ることで貧者への眼差しが失われ、「レプラ」ないしは「エレファンティアシス」という名称のもとでその人びとの本質、即ち人間性が見損なわれることを懸念したと解される。病名を告知せずにその窮状を語り出すことで、聴衆がこれらの人びとを憐れみとともに見、同じ人間として援助するように促している。こうし

て、この説教を通して彼は、病名云々ではなく、同族者としての貧者それぞれに眼差しをむけ、人間同士として救いまた助け合うことを述べたのだと理解できる。この点で興味深いのは、救貧の文脈でグレゴリオスが、相互性にもとづく友愛・友情 (φιλία) に言及することである。「またその人びととの友情を見下して考えてはなりません。手は切断されていても、〔その病者は〕共闘できないほど弱くはありません」⁽²⁸⁾。病気の貧者は一方的に援助されるだけでなく、貧者も援助する人に向かって働くことができる。グレゴリオスは語る。両者共に人間であるということが、グレゴリオスの強調するところなのである。

注

- (1) 原典はブリル社刊の「グレゴリオス著作集」(Gregorii Nysseni Opera. 本論では GNO と略記) を使用。In titulū quatenus uni ex his fecistis mihi fecistis. GNO IX pp. 109-127. なお邦訳は拙著『司教と貧者—ニュッサのグレゴリオスの説教を読む』(新教出版社、二〇〇七年、六七—一二頁) を参照。以下引用はこの拙著掲載のものを用いる。なおこの説教については拙著『司教と貧者』の解説「ニュッ

サのグレゴリオスにおける救貧の思想」(一七九—一八三頁) を参照のこと。

- (2) この病気が嫌われていたことについて、一例を挙げておく。Inscriptiones Graecae 3, 1423 はローマ時代の墓碑銘であるが、そこには次のように記されている。「ソクラテスのアントーニアが、至福なる我が夫シュネシオスのアントニオスに、この墓を苦難の終結として建てて。私は地中に住む神々にこの墓をお守りくださるよう委ねます。……この墓を取り除いたり、石を奪ったり、何か別のものを移動させたりする者は、別人を使ってであつても、……四日熱や象皮病 (elephant)」、動物と人間に生じる害悪であればなんでも、あらゆる害悪によって試練を与えられますように。こうしたことがこの墓から取られて何かを動かそうとする者に生じます「ελεος」(G. Dittenberger (Ed.), Inscriptiones Atticae Aelatis Romanae, Pars II, Berlin 1882, S.30-31.)。呪ふの言葉としてエレファスが有効であったことを述べており、当時この病気が恐れられ嫌われていたことを物語っている。
- (3) 澤野雅樹『癩者の生 文明開化の条件としての』、青弓社、一九九四年、二七頁。なお社会学において議論される Secondary Deviance も今の議論の参考になるが (R. Jenkins, Social Identity, Routledge, 1996, pp.74f.)、社会学の概念を使った研究は今後の課題とした。
- (4) De pauperum amore, oratio XIV, PG35 865A.
- (5) 以下、列挙しておく。『雅歌講話』第一講話 (GNO VI,

- 33, 5-11)、『雅歌講話』第七講話 (GNO VI, 403.1)、『雅歌講話』第一一講話 (GNO VI, 338, 20-339, 4)、『雅歌講話』第一二講話 (GNO VI, 368, 7-11)、『エマノエーオス駁論』 (GNO II, 228, 23)、『説教『光の日』』 (GNO IX, 235, 5-7)、『三日の問隙』 (GNO IX, 292, 13-17) 二例、『エダヤ人への証拠』 (PG46, 204 B)、『伝道の書講話』 (GNO V, 403, 1)、『第一書簡』 (GNO VIII-II, 8, 10-11) 二例、以上である。
- (6) 拙論「ニュッサのグレゴリオスにおける *λέπρα* (レブラ) の用法と意味」、『神学研究』第五五号、二〇〇八年、二七—三四頁。
- (7) PG 36, 493-606.
- (8) この説教の中に病気の感染を否定する文脈で「とういうのも、若者から老人にいたるまでこの人々の治療に献身して、これに打ち込むことで身体自然本来の健康を何も損なうことなかった者がどれほどいることか、確認することができるとしようか」(GNO IX, p.124; 拙著一〇四頁—一〇五頁)と述べている。ここで言及される「若者」や「老人」は救貧施設 *シレイアス* で看護などに従事していた人々と推定される。
- (9) おおよそのところを指示するなら、GNO IX pp.116-119 (拙著八一—九〇頁) を挙げることにあつて。
- (10) 580C: *Βασιλείου δὲ οἱ υιοὶ οὐδύτες, καὶ τὰ τῶν τραυμάτων ἀκνῆ, καὶ ἡ Χοληροῦ μύμησις οὐ λόρω μέν, ἔρω δὲ λέπραν καθάλιουτος.*
- (11) 今日「エレファンティアシス」(elephantiasis)、『象皮病』はフィラリアという寄生虫による病気で、主に足が腫れ、皮膚が厚くザラザラする病気をいう。しかし古代においてエレファンティアシスという足に限らず、顔など全身に症状が見られる。また他の症状などを考え合わせると、レブラと同様の病気であり、今日のハンセン病と推定できる。
- (12) なおこの他に *ἐλέφας* もこの病気を表示するが、それはあくまでも俗称としてであり、*ἐλέφας* の意味するところは一般に動物の「象」あるいは「象牙」である。今回はこの *ἐλέφας* に基づいて病名が使われている可能性は煩瑣であることが予想されるのと、また病名としては俗称であるので未調査にとする。
- (13) GNO IX, p.116 (拙著『司教と貧者』八三頁) : ὅστε ἀμφίβολον τὸ φαεινόμενον εἶναι, ὅτε ἀρθρώτου καθαρῶς ὅτε τινὸς ἀλλοῦ τῶν ἑσῶν φέρων ἐφ' ἑαυτοῦ τὰ γνωρισματα..... εἰς πρὸς τὰ ἀλγιστα τρέψης τὴν εἰκασίαν, οὐδὲ ἐκείνα τὴν ὁμοίτητα τῶν φαεινόμενου ποοίεται.
- (14) Ps-Galenus, *Introductio seu medicus*, 第二三章 (Kühn ed.), *Claudii Galeni Opera Omnia*, XIV, pp.756-759) では、皮膚疾患の類概念として「エレファンティアシス」に言及され、本文で挙げた病名と並んで「下位概念として「レブラ」に言及されている。この箇所については拙訳があるので参照されたい(拙著『司教と貧者』資料2—2、一九九—二〇二頁)。

(15) M. D. Grmek, *Diseases in the Ancient Greek World*,

tr. by M. Muellner/ L. Muellner, Baltimore; The Johns Hopkins U. P., 1989, Ch. 6, Leprosy. The Gradual Spread of an Endemic Disease, pp. 152-176. なお一世紀末のプルトルコスのもリアの中は「新しい病気が生じるということとは可能か、また何故か」(「食卓談集」八の九)という題の対話があり、そこではまさにこの「エレファンティアアシス」という新しい病気が議論の対象となっている。つまりプルトルコスの時代と地域においてこの病気が新奇の病気であり、一般化していなかったことを示している。ただプルトルコスは古より存在すると述べ、紀元前一世紀の医学者を挙げてゐる。こうした対話の存在を考慮すると、徐々に一般化していったと考えられる。

(16) エレファンティアアシスは「ヒポクラテス集成」(Corpus Hippocraticum)には見出せな。なお、これに言及する

主な文献は次のとおり。Celsus, *De medicina* 3, 25; Ps-Galenus, *Introductio seu medicus* 13; Plinius, *Historia naturalis*, 26, 3; 5; Lucretius, *De rerum natura*, 6, 1114-1115; Dioscolides, *Materia medica*, 2, 2. また医学者の書いたものとしては「世紀ローマで活躍したカッパドキアのレタイオス『慢性病の原因と徴候』第二章 (F. Adams (ed.), *The extant works of Aretaeus the Cappadocian*, Boston: Milford House, 1856 [rep. 1972], pp.123-129; 236-240) や四世紀のオリシニオスの『医学集成』(I. Raeder

(ed.), *Oribasii Collectionum Medicarum Reliquae*, Vol.

IV, *Corpus Medicorum Graecorum* VI 2, 2, Amsterdam 1964, pp.246-249) が挙げられる。

(17) Celsus *De medicina* 3, 25 (LCL292, W.G.Spencer(ed.) 1935).

(18) 例えばグレゴリオスと同時代の医師オリバシオスの『医学集成』(注一六を参照)では七五章で「エレファンティアアシス論」(続く七八章では「クネシモン、アルフォス、レイケー、レウケー論」)と章を替え区別して論述されている。

(19) GNO IX, pp.117, 14-25; ἀλλ' οὐδὲ πύλαι βούουσι τοῦτοισι πρὸς τοὺς ἀλλοὺς ἀνθρώπους κοινῶν οὐδὲ ποταμοὶ πορευόμεναι μῆδεν ἐφέλκεσθαι τοῦ τῆς ἀρροστίας μολύσματος, ἐν κύων λάψῃ τοῦ ὕδατος τῇ αἰμοβόω γλώσση, οὐκ ἐνομιέθη βδελυκτὸν διὰ τὸ θηρίον τὸ ὕδωρ, ἐὰν ὁ ἀρρωστος προσεγγίῃ τῷ ὕδατι, εὐθὺς ἀρεκρήσθη καὶ τὸ ὕδωρ διὰ τὸ ἀβαρπτον, ταῦτα διεξέρχονται, ταῦτα οὐδύονται, διὰ τοῦτο δίτρουσι ἐαυτοὺς κατ' ἀνάγκην πρὸ τῶν ἀνθρώπων οἱ δελιαῖοι, ἰκέται παντὸς τοῦ παρὰρυχάνουτος γινόμενοι. πολλὰκις ἐπεδάκρυον τὸ σκεθωτῶ τοῦτο βέλματι, πολλὰκις πρὸς αὐτῶν τὴν φύσιν ἀπευστρέτησα καὶ νῦν πρὸς τῇ μνήμῃ συγχέομαι, εἶδον πάθος ἐλαεινόν,

- eíδου θέματα δακρύωνων πλῆθες.*
- (20) PG 36, 580A
- (21) 他的表現としては以下のものが挙げられる。「同族者」(*ὁμόφυλος*)「本性を共同する者たち」(*τῶν κοινώνωντες τῆς φύσεως*)「同胞者」(*ὁμορευῆς*)「同胞者」(*ὁμορόφιοι*)。
- (22) GNO IX, p.115, 22-23: *περὶ ἀνθρώπων ἀνθρώπος, οὐδὲν ἰδιόζον ἐν σεαυτῷ παρὰ τὴν κοινήν κερτημένος φύσιν.*
- (23) GNO IX, p.120,12f.
- (24) 拙著『司教と貧者』の解説「ニュッサのグレゴリオスにおける救貧の思想」(一七九—一八三頁)、あるいは拙論「人間愛と終末論——ニュッサのグレゴリオスにおける救貧の思想」『宗教哲学研究』第二四号、二〇〇七年、一八一—三四頁)を参照。
- (25) この点、たとえばマタイ福音書二五章にみられるキリストと貧者の同顔性、類似性をもとにした神と貧者の連関を神学的に考察することについては他日を期したい。
- (26) Contra Eunomium Lib.II, GNO I, 257,2-25: *εἰ γὰρ τι πρὸς δῆλωσιν τῆς θείας κατανοήσεως μεμαθήκαμεν ὄνομα, πάντα ταῦτα κοινωίαν ἔχει καὶ ἀναλογία πρὸς τὰ τοιαῦτα τῶν ὀνομάτων, ἃ τοῦ τινὸς ἀνθρώπου τὴν ἰδιότητα δείκνυται, ὡς γὰρ οἱ τοῦ ἀγνωσμένου διὰ τινω γνωρι-*

ομάτων δηλοῦντες εὐπαροίδη αὐτὸν, ἐν οὕτω τύχη, καὶ τῶν εὐ γενοσὶν λέγουσιν εἶναι καὶ λαμπρὸν ἐν πλοῦτι καὶ ἐν ἀξία περιβλεπτῶ ἀποδοῦντα τε τῇ ὥρᾳ καὶ ἐπὶ τόσον διανεστηκότα τῷ σώματι, καὶ τὰ τοιαῦτα λέγοντες οὐ τὴν φύσιν τοῦ δηλοῦμένου, ἀλλὰ τινὰ γνωρίσματα τῶν περὶ αὐτὸν γινωσκομένων ἐδίωσαν (οὔτε γὰρ τὸ εὐρενὲς οὔτε τὸ πολυχρημάτερον οὔτε τὸ περιφανεὲς τοῦ ἀξιωματος οὔτε τὸ κατὰ τὴν ὥραν περιβλεπτῶν ἢ ἀνθρωπότης ἐστίν, ἀλλ' ἕκαστον τούτων περὶ τοῦ τινα θεωρεῖται) οὕτως καὶ πάσαι φωναὶ [αἰ'] παρὰ τῆς ἀγίας γραφῆς εἰς δοξολογίαν θεῶν ἐλευρημέναι τῶν περὶ τοῦ θεοῦ τι δηλοῦμένω ἀποσημαίνουσιν. ἰδίαν ἔμφασιν ἐκάστη παρεχόμενῃ, δι' ὧν ἡ τὸ δυνατόν ἡ τὸ τοῦ χείρονος ἀπερίδεκτον ἡ τὸ μὴ ἐξ αἰτίας εἶναι ἡ τὸ μὴ εἰς περιγραφήν τέλους ἐρχεσθαι ἡ τὸ κατὰ πάντα ἔχειν τὸ κἀκός ἡ ὅλως τι τῶν περὶ αὐτὸν διδασκόμεθα αὐτῶν δὲ τὴν οὐσίαν ὡς οὔτε διανοοία τιμὴ χωρητὴν οὔτε λόγῳ φραστὴν ἀποληπραγμύνητον εἶπασε, σιωπῇ τιμᾶσθαι νομοθετήσασα ἐν τῷ καλῶσει τῶν βαθυτέρων τῆν ζήτησιν καὶ ἐν τῷ λέγειν μὴ δεῖν ἐξενεγκεῖν ἰσῆμα πρὸ προσώπου θεοῦ.

(27) 『モーセの生涯』についてはSC所収のダニエル版を使用す⁸⁷。De vita Moysis, II 234-235: Τοῦτο δὲ οὐκ ὡς αἰτίου τοῦ θανάτου τοῖς ὁρώσι γινόμενον ὁ λόγος ἐνδεκνυται. Πῶς γὰρ τὸ τῆς ζωῆς πρόσωπον αἰτίου θανάτου τοῖς ἐμπελάσασιν

本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(C)・「四世紀 Cappadokia 教父の救貧の思想と実践」)の交付を受け研究成果の一部である。

γένοιτ' ἄν ποτε; Ἀλλ' ἐπειδὴ ζωοποιὸν μὲν τῆ φύσει τὸ θεῖον, ἴδιον δὲ γνώρισμα τῆς θείας φύσεως ἔστι τὸ παντὸς ὑπερκεῖσθαι γνώρισματος, ὁ τοίνυν τῶν γινωσκομένων τι τοῦ θεοῦ εἶναι οἰόμενος, ὡς παρατραπείς ἀπὸ τοῦ ὄντως ὄντος πρὸς τὸ τῆ καταληπτικῆ φαντασία νομισθῆν εἶναι, ζωῆν οὐκ ἔχει.

Τὸ γὰρ ὄντως ὄν ἢ ἀληθὴς ἔστι ζωῆ. Τοῦτο δὲ εἰς ἐπίγνωσιν ἀνέφικτον. Εἰ οὖν ὑπερβαίνει τὴν γνώσιν ἢ ζωοποιὸς φύσις, τὸ καταλαμβάνομενον πάντως ζωῆ οὐκ ἔστιν. Ὅ δὲ μὴ ἔστι ζωῆ παρεκτικὸν γενέσθαι ζωῆς φύσιν οὐκ ἔχει. ὄντως οὖν πληροῦται τῷ Μωσεί τὸ ποθοῦμενον, δι' ὧ ἀπλήρωτος ἢ ἐπιθυμία μένει.

(87) GNO IX, 122, 20-22.